

第一三三号に寄せて

吉見 孝夫

第一三号をお届けします。これで *teen* の付くナンバ―になりました。ティーン雑誌の仲間入りです。

昨年来「不要、不急」という言葉が飛び交っています。「この雑誌は不要ではないか」と問われれば、屁理屈を捏ねても反論し、「不急だろう」と責められれば、「百年後の理解者を待っているのだから、確かに不急だ」と嘯くつもりです。多くの図書館が未だに利用制限や閉館の措置を取っているのは大きな痛手です。それが支障となつて前号から二年も間隔があいてしまいました。

前号についても多くのお教えを賜りました。中務哲郎氏には、鈴木潤吉氏の「鈴木三重吉とイソップ」につき確認したいことがあり、事前に鈴木論文をメールでお送りしたところ、一時間後つまり即答をいただきました。三重吉の「おしやべり」は「ジャータカ」二二五番、『今昔物語集』巻五第二四話を思い出させるとの御指摘です。更には『イソップ寓話の世界』（筑摩書房、一九九六年三月）でもお書きになったとあって、己の不明に恥じ入りました。残念ながらその時には第一二号は印刷にかかつており、御教示を反映させることはできませんでした。鈴木氏には不確かな形で情報を提供し、お詫びいたしま

す。『今昔物語集』のこの話については、増田良介「今昔物語集巻五第二四・亀、鶴の教を信ぜずして地に落ち甲を破る語」（『別冊行動と文化』第二号、一九九四年六月）という精緻な論考を読んでいたのに、「おしやべり」と結びつけることに思い至らなかったのです。

『イソップ寓話の世界』は二〇年以上前に読んだのが最初です。今回改めて読み返して、記憶の風化に我ながら驚きました。風化は一つには忘却として現れます。今回がその例です。忘却は読んでいないのと同じで、無知を笑われればすむ話です。しかし風化はもつとタチの悪い形でも顕現します。読んで得られた知見がいつの間にか自分自身で発見したことのように記憶がすり替わるのです。これを自慢げに公表すれば、自覚なしに剽窃を犯してしまいかねません。

鈴木論文には、花間隆氏、難波博子氏からも反響がありました。詳しくは今号のお二人の名の論考をお読みください。三重吉の「あほう鳩」では巢作りに失敗するハトが登場します。「鳩居」という言葉もあるように、古来ハトは巢作りが下手だということになっているのに気づかせてくださったのは山西正子氏です。

山西氏は、『教育小供のはな誌』で「アリとキリギリス」が「蟻といなごの話」となっており、いなごがアリの餌食になる（第一二号六六ページ）のに注目し、いなごの害に苦しむ農民は溜飲を下げるだろうとの感想も送ってくださいました。読者の多くが農家の子らであることに改めて気づかされました。当時の読み手の立場に立つて読むという点では、こんなこともあります。二人の女性の間にあって頭髮を抜かれる話（中務訳では「ロマンス・グレーと二人の愛人」）は子ども向けのイソップには採用されないと思うのは、どうやら一九世紀には通じない倫理観のようです。明治二〇年（一八八七）の『小学生教育昔噺』に商人と二人の妾^{てかけ}の話として出てきます（第一二号二一ページ参照）。妾の一人や二人いるのは男の甲斐性だし、それを子どもが知ったとしても異とするには足りないというのが当時の常識なのでしょう。

第一二号五九ページ下段四行目の「8はウサギとカメの話」とあるのは「11は……」と訂正します。これは難波博子氏の御指摘です。こんな箇所まで丁寧に読んでくださっていることに感謝いたします。

和本を所蔵している方のお役に立ちそうな論文を読みましたので、ご紹介します。中川邦明・中川美智子「和本食害虫シバンムシのドライアイスによる駆除」（『常葉大学教育学部紀要』第四〇号、二〇二〇年三月）です。図書館などでは食害を防ぐために二酸化炭素処理をするようです。個人ではボンベを使用するのは困難ですが、ドライアイスで代用できるということです。実行するには

危険が伴いますので、直接論文に当たってみてください。常葉大学・常葉大学短期大学部リポジトリ（<https://tokoha-u.repo.nii.ac.jp>）に収められ <http://doi.org/10.18894/00001970> からダウンロードできます。古活字版『伊曽保物語』を綿密に調査してその系統関係を考察した、また無刊記第六種本の唯一の所蔵者であった中川芳雄氏は論文著者の御尊父です。邦明氏は小誌をお送りしている中ではただ一人理系を専門とする方でもあります。

ここ数年イソップ関連の学術書が何点か出版されました。そのいくつかをご紹介します。

◎府川源一郎『「ウサギとカメ」の読書文化史 イソップ寓話の受容と「競争」（勉強出版、二〇一七年四月）

一寓話だけで一書を成すという離れ業が可能となったのは、『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究——リテラシー形成メディアの教育文化史』（ひつじ書房、二〇一四年二月）という一二〇〇ページに及ぶ大著の緻密な作業があったからでしょう。

◎加藤康子・三宅興子・高岡厚子『イソップ絵本はどこからきたのか 日英仏文化の環流』（三弥井書店、二〇一九年五月）

この書からはヨーロッパの出版事情を学ぶことができました。ただ、仮名草子『伊曽保物語』の一写本の翻刻に過ぎない大久保夢遊編あるいは竹村友治郎編の『伊曽保物語』を香雪散人訳、竹村訳とするのは訂正していただきたいところです（一五五ページ）。

◎吉川斉『イソップ寓話』の形成と展開』（知泉書館、二〇二〇年一月）

古典ギリシア語、ラテン語の文献を駆使した本書を批評する資格は私にはありません。ただ学ばせてもらえばかりです。渡部温、上田万年などの仕事を、ヨーロッパにおけるイソップ受容の歴史までを視野に入れて考究する必要を教えられました。

◎ローレンス・マルソー『絵入卷子本伊曾保物語 翻刻・解題・図版解説』（臨川書店、二〇二二年一月）

小誌第六号で晴明会館所蔵本をどなたか研究してほしいと呼びかけました。それに応じたというわけではないようですが、到頭この絵入卷子本を手がけた研究書が現れました。詳しくは今号の御自身による紹介文をお読みください。著者はアメリカ出身で、アメリカ・日本・ニュージーランドの大学で日本文学を講義した経験をお持ちの方です。

かつてケンブリッジ大、ハーバード大で日本語・日本文学を講じた板坂元は、写本・板本が読めず活字本だけで済ます欧米の日本研究者を厳しい言葉で批判しました（『考える技術・書く技術』講談社、一九七三年八月）。見方を変えていえば、日本人研究者は写本や板本の複雑な表記という障壁に守られて、欧米に限らず外国の学者の参入を阻むことができたわけです。しかしそんなガラパゴスの鎖国天国がとうに崩壊していることは、この書が証明しています。

今村浩子氏がイソップから二〇話を選んで、内容を知

っているかどうか、札幌市立北野中学校一、二年生一八三人を対象として調査されました。一地方の一中学校の調査ではありますが、一般化してもそう的外れにはならないと思います、ここにその結果をお伝えします。

- 1 ウサギとカメ 95%
- 2 正直なキコリ 84%
- 3 アリとキリギリス 80%
- 4 オオカミ少年 65%
- 5 北風と太陽 50%
- 6 ネコの首に鈴をつける 44%
- 7 田舎のネズミと町のネズミ 29%
- 8 欲張りの犬 22%
- 9 ツルとキツネ 20%
- 10 ロバと親子 19%
- 11 金の卵を生むガチョウ 17%
- 12 ネズミの恩返し 15%
- 13 カラスと水差し 11%
- 14 腹をふくらませるカエル 10%
- 15 キツネとブドウ 8%
- 16 塩を運ぶロバ 5%
- 17 アリとハト 4%
- 17 農夫と助けられたワシ 4%
- 19 カラスとキツネ 3%
- 20 井戸の中のキツネとヤギ 1%

この間にも何人かの方から御著書、御論文の惠贈に与りました。深く感謝申しあげます。